

徳川家康

8

龍虎殿の巻
華嚴の巻

徳川家康

山岡荘

徳川家康

続 龍虎の巻・華嚴の巻

華嚴

山岡莊八 講談社



徳川家康 第八卷 続龍虎の巻

華嚴の巻 昭和三十九年十一月十

五日第五刷発行 著者 山岡莊八

発行者 野間省一 印刷所 凸版

印刷株式会社 製本所 藤沢製本

株式会社 発行所 株式会社講談

社 東京都文京区音羽町三ノ一九

振替 東京三九三〇 電話 東京

(九四二) 一一一一 (大代表)

©山岡莊八 一九六三 定価 六百二十円

徳川家康

8

続龍虎の巻
華嚴の巻

目次

続龍虎の巻

虚々実々

七

出奔

二二

犠牲の風

三七

山茶花

四八

地鳴りの春

六四

時勢の流れ

八五

三島の会見

九六

人質婚嫁	一〇七
勝利者	一一八
華嚴の卷	
三河の計算	一三七
聚楽の心	一五五
反抗	一七四
花に唾する	一八五
両雄対面	二〇二
小姓の眼	二一八

觀察者

二三三

東をめざす

二五一

震源地

二六八

派閥の芽

二八三

島津の風

二九八

政治と宗教

三一四

蜘蛛

三三三

男と女

三四七

無心有心

三六五

策謀の虫

三八〇

付 録 (参考地図及び諸家系譜)

装 幀 稲垣行一郎

挿 画 木下二介

箱裂地 麻地草花人家文様茶屋染

提供 山口 勉

表紙金版 徳川家康直筆署名

徳川家康

8

続龍虎の巻
華嚴の巻



続龍虎の巻

虚々実々

一

大患を経た後の、家康の述懐は、

「——秀吉も無い、家康も無い。天下のため両者を裁く神仏の立場に立とう」

と、いうのであり、関白になった秀吉の心境は家康など問題にしない立場で大きく志を伸ばしてゆこうというのであった。

この両者が、それぞれ兵を率いて動きだしたのは七月の末。

まず病みあがりの家康が先に駿府へ出向いていって、兵の指揮に当らなければならなくなったのは皮肉であった。

秀吉は、家康のもとから石川数正を通じて家老の人質などは心外だという返事を受取ると、

「——それは悪かった。家康がその気なら、何の改めて人質などいるものか」

あっさりとそれを撤回して、更に、本多作左衛門を通じて申出た、

「——実母危篤につき、本多仙千代を至急帰国させられたい」

という底深い家康の探りにも、笑いながら応じていった。

「——おう、よいとも。人間は孝心が第一じゃ。充分看護してやるがよい」

したがって人質を出さぬばかりか仙千代まで取戻した家康側の策戦は一応図に当たったかのように見えたのだが、秀吉の頭脳はまた、それほど単純にしてやられるようには出来ていなかった。

彼は、人質を取らぬ代りに、家康の戦闘力を一カ所に釘付けさせて、決して佐々成政の富山攻めを妨害させないよう、きびしい手を打って来たのだ。

他でもない。

越後の上杉景勝をして、信州の上田城にある真田昌幸父子を家康に叛かせていったのだ。

この手は、或いは人質の拒否などとは比較にならぬ妙手だったかも知れない。

とにかく、今となつては、徳川家にとって最大の味方は、家康がその娘督姫を嫁がせてある小田原の北条氏直と、その父の氏政だった。

ところが、その北条氏と上田城の真田昌幸の間に、この頃、一つの争いが起つていた。真田父子が自身の手で打取つた上州の沼田城を、北条家に引渡せというのである。

真田父子はむろんこれを拒んでいた。

そこへ家康が口を出し、替地をやって巧みに両者を納得させようとしていたのだが、慧眼の秀吉がその紛争を見のがす筈はなく、彼はすぐさま上杉景勝に昌幸の後援をするようにと画策していったのだ。

上杉家の援軍が来るとなれば、昌幸は北条氏に従う筈はなく、北条氏が不満をのべれば、今は唯一の味方であるということから、家康は黙視出来ずに昌幸を討たなければならなくなる。

家康が昌幸の上田城を攻めだせば、その間に秀吉は二三人の人質などより安心して佐々成政に当れるという、歩を取らせておいて後から角を張られる将棋のような妙手で、

病みあがりの家康は否応なしに駿府まで出かけてゆき、そこで、秀吉よりも一足先に、上田城攻めの指揮に当らなければならなくなつていった。

と言って、これで家康の盤面に敗色が濃くなつたというのでもなかった。その証拠に、家康は駿府へ立つ日の馬上で、いつもよりずっと笑顔が豊かであった。

二

秀吉には秀吉の計算があり、家康には家康の計算があつた。

そしてこれは、しばしば両者を共に利する場合がある。

秀吉にとっては家康の主力を上田城に釘付けしてゆくことは佐々成政を攻めるために絶対に必要な事であり利益であつたが、その秀吉の利益は、家康にとつても決して不利ではなさそうであつた。

彼は、自分のうしろに馬を駆つてついて来る本多正信をかえりみて、

「うまくいったの」

大井川の手前の烈日の下ではじめてもらした。

「仰せの通り」

と、正信も上眼で笑つた。

「秀吉も、仲々よい事をやりまする」

「ん……これで北条父子に疑われずに、堂々と駿府城の修理が出来るわ」

家康が甲信の固めに駿府城を大改造しておきたいというのは年来の望みであった。

戦国の味方は味方ではない。現在は氏政の子の氏直を婿にしている家康だったが、氏政は婿の氏直を、まだ家康に一度も会わせていなかった。督姫を嫁がせてから四年にもなるというのに……

したがって表向きはこよない味方でありながら、裏面では誰彼なしに絶えず警戒しあっている。こんどの上田城攻めもむろんそうした打算を義理と見せかけての行動だったが、そのために駿府城の大改造という宿望が達せられるのは、甲信のためばかりでなく、北条氏への備えのためにも絶対に必要なことだったのだ。

「秀吉が、成政を降す間に、手を拱いていなければならぬいいわれもないでう」

「仰せの通りで——」

「こんどの戦いには、数えてみると三つの得がある」

「三つだけのござりまするか」

「うん、その第一は駿府城だが、第二には、これで士気が奮うて甲信の地が固まる」

「第三は……」

と言いかけて、正信は、自分の腰から青竹の筒をとって家康に渡した。

「汗が出すぎて居ります。清水をお召しなされませ」

「うん。さすがに、まだこたえるわ」

家康は素直にその水を一口のんで、竹筒を正信に返した。

「第三はこれで、秀吉も、組みし易しと思うであらう」

「では、まだ第四がござりまする」

「フフ、第四は何じゃ？」

「北条父子が、義理固いお館じゃと、感心致します。これは小さな得ではござりませぬ」

「フフ……」

道は乾ききって、軍列のうしろは土埃で見えなかった。風もなく、雲もない。両側の田からは湯気の立っていそうな暑さであった。

「お館さまに、もう一つ伺うてみたい事がござりまする」

「なんじゃ。第五の得か？」

「いいえ。お館さまは、本気で真田父子を滅ぼすお気持ちでござりまするか」

それを聞くと、家康はひどくあわてて周囲を見まわした。

「シ……とぼけた事を申すな正信」

三

叱られて正信もあたりを見た。

会話は誰の耳にも入らなかったと見えて、すぐ後に続いて来ている阿倍正勝と牧野康成とは、しきりに北方行手の山脈を指さして何か言いかわしている。

「滅ぼす、滅ぼさぬなどと言うことは軽々しく口に出すことではない。士氣にかかわったら何とするのだ」

「恐れ入りました」

「したが……」

と、家康はもう一度馬を寄せるようにして、

「無理してまで、滅ぼさねばならぬ相手ではない。真田父子はの」

「正信もさように心得まする」

「秀吉が成政と戦うて居る間、こちらもほどよく戦いながら駿府に城を築けばよいのじゃ」

正信は神妙にうなずいて馬を離れた。そこまで聞けばもう家康の肚はよく分った。

真田父子のうしろには上杉景勝があり秀吉があるのだ。うかつにこれを滅ぼしたら、佐々成政を成敗したあとで、秀吉と景勝の矛先は家康に向けられるに違いない。

しかし、真田父子と互角に戦い、敢て勝負を決せずにお

けば、秀吉が仲に入って和議を提案するだろう。そこで秀吉の顔を立てて兵を退き、真田父子を生き残らせる。

さすれば北条父子の秀吉に対する憎しみは加わり、その憎しみが徳川家への接近を計らせて、真田父子を滅ぼした以上の効力で反秀吉の「力——」になり得るのだ。

この間の微妙な力学的な駆引きが果して家康の脳裡にあるのかどうか。それを本多弥八郎正信はさぐってみたかったのだ……。

以前には、家康も信長も、ただ生き残るために是が非でも敵を倒して勝たねばならぬ時代があった。

しかし、そうしたきびしい戦国の様相は去りかけて、そろそろ勝負を局面以外から見直さねばならない時に入っている。強いばかりの武将ではなく、充分に政治手腕と外交手腕が必要になって来ているのだ。

それなればこそ、本多正信、阿倍正勝、牧野康成などが、猛勇をもって鳴った酒井、本多（忠勝）、井伊、榊原などの他に、つねに家康の側近にあって意見を徴されるようにもなっているのだが……

こうして、家康が駿府の城に入って十余日。八月の始めに至って秀吉もまた大坂城を出陣した。

秀吉の出陣よりは更に悠々たるものであった。

京都から大坂の川筋に船をうかべて、新関白の威を示し

たり、堺へ出向いて改めて世界状況の説明を求めながら、茶を弄んだりしたあとで、いよいよ成政成敗の陣頭に立ったときは、その軍装の豪華さは、まさに人々の眼を奪い、肝を消させるに充分だった。

かつて美濃の斎藤龍興攻めの折りに用いだった千成瓢の馬印は、いまは金色さんらんとして烈日をはじいていたし、自慢の馬蘭後立の兜も眼のくらむような黄金の後光であった。

置き肩、つけ髭の化粧は、新しい関白として、秀吉の相貌を全く変え、そのまま絵巻物の中からぬけ出たようなきらびやかな偉観であった。

むろんこれも、佐々成政などと本気で戦う気持は全くない……

四

家康の主力が、上田城の周辺に結集されたのは見さだめであったし、四国のおさは十分にさせてあった。

したがって、秀吉の今度の軍旅は遊山にひとしい。

わざわざ堺衆のすすめて寄こした曾呂利新左衛門を新たに織田有楽などと共にお伽衆に加えて、到るところで、新関白が、いかに平民的であり、人情的であるかを天下に宣伝してゆけばそれでよいのだ。

成政がどのように反抗してみたところで、丹羽長秀は切腹しているし、家康の主力は他に釘付けられているのだから、手も足も出るものではない。

そこであっさり包囲しておいて、この聞えわたった頑固者を心ゆくまで翻弄してやるつもりであった。

この場合の翻弄は決して戦術戦略によるのではなく、どこまでも人間と人間との器の相違、一徹な昔流の武將と、新関白の政治力の違いを見せつけようというのだが……

その意味では佐々成政は曾つてない一つの幸運と一つの不運に見舞われようとしているのだ。

幸運ははじめから討たれる怖れがないと言うことであり、不運は命を助けられて生きながら秀吉の偉大さを証明してゆく宣伝の具に供されるということであった。

家康は、秀吉も仲々よいことをやって呉れると言って笑った。

秀吉もまた、その点ではおなじであった。

彼は英雄のもとから密告されて来た上田における徳川勢の陣備えを聞かされると眼を細めて笑った。

家康は駿府で指揮をとるが、現地へ派遣された軍勢は、大久保忠世、鳥居元忠、平岩親吉、柴田康忠、岡部長盛、諏訪頼忠、保科正直、松平康国、屋代勝永、三枝昌吉、城昌茂、曾根昌世等を第一軍として、旗下に井伊直政、大須

賀康高、松平康重、牧野康成、菅沼定威など凡そ一万五千が動員されていることが分ったのだ。

「——それだけの軍勢を割いたのでは、二面作戦は出来まいでろう」

しかしその言葉の他に、秀吉はもう一つ誰にも言わぬあの期待を胸に秘めていた。

彼もまた家康が本気で上田城のほとりに大消耗戦を展開するとは思っていなかったが、しかし彼が深入りしているうちに、うまく上杉景勝の越後勢が援軍として到着すれば……という仮想であった。

戦は水ものだった。

徳川勢が、もしも信濃で、上杉、真田の連合軍に退路を断たれるようなことでもあれば、そこには思いがけない大遭遇戦が展開されまいものでもない。

そうなると、真田勢などは問題ではなく、家康も景勝も、血みどろの決戦を続けなければならなくなり、双虎ともに傷ついて、その力を半減するということだった。

(そうなれば、もはや、徳川も上杉も爪のない猫になるのだが……)

第一案で充分に牽制の実をあげながら、ここにも又二段三段と、虚々実々の秘謀がかくされていた。

その意味では両者いずれにも軍配をあげかねる備えのま

まで、一方は上田城において、一方は北陸の地において、ともに戦いの火蓋は切られた。

五

八月二日に上田城の真田安房守昌幸にはじめて攻撃をかけさせた家康は、その後、怒っているようないいな、八方睨みの構えのままで、前進させたいと思えば退かせ、退いたと思えば援軍を送った。

その間の戦記では、いずれもこれは真田勢の卓抜した備えと旺盛な士気のために、徳川勢が苦戦して、攻めあぐんだもののように記されている。

真田勢の侮るべからざることは言うまでもなかったが、しかし家康としては、上杉勢の到着と、秀吉の動きを見つめながら、ここに始めて、甲信の地に得た新しい部下の実力を試す一大演習を展開していったつもりであった。

むろんその間に、駿府城が着々として築かれていったことは言うまでもない。

新家臣の演習の相手としては真田勢はまことに得難い相手であった。

彼等は、それまで敵であった徳川勢と、はじめて相携えて神出鬼没の真田勢にあたり、極めて自然に友軍としての共感と親密度を深め、更に「徳川家」への信頼を植えつけ

られていった。

わけでも上杉家の援軍を率いて信州の地に入つて来た藤田能登守と、木曾の小笠原の援兵とを、井伊直政が一手に引受けて追いつらして見せた実力はその信頼に花を添えた。

家康が、秀吉の進退と睨みあわして、上田付近の軍勢に、陣払いを命じていったのは九月二十六日だった。

家康自身は、この五日前、いったん浜松城に戻つて来て、こゝで残っている諸將を集めて協議を終り、上田へ引揚命令の届いた二十六日には、三河の西尾から吉良の砦を悠々と巡見していた。

北国攻めを予期のとおりに終つた秀吉が、改めて上杉景勝と同盟を結んで大坂に引揚げ、いよいよ四国攻略にかかろうとしている。

その優勢な秀吉の海上軍に、或いは三河へ奇襲上陸されるようなことがあつてはとの用心からだつたが、ここでも士氣は旺盛、備えも申分なかつた。

したがって秀吉も意のままに事を成し得たのだが、家康もまた、決して虚実の駆引きで敢えて譲らぬ効果を納め得ていた。

ただ、真田昌幸父子を撃滅せずに陣払いしたことで、小田原の北条氏政がひどく不機嫌になつてゐるのは予期して

いたこととは言え、ただ一つの気がかりであつた。

若し氏政が、こんどの真田攻めのうちに、駿府築城の謀計があつたことを悟つたら、或いは激怒して、駿河のうちへ軍をすすめて来るかも知れない。

(こゝらでひとつ、その感情を柔らげておかねばなるまい)

十月三日に浜松城へ戻つた家康は、そこではじめて氏政父子への対策についてあれこれと思案をめぐらした。

わが婿の氏直とはまだ対面もしていない。この機会に、氏政、氏直父子と何れかの地で落合つて、こんどの撤兵は、秀吉という両者共通の敵を警戒しての、やむないものであつたことを納得させておかねばなるまい。その意味では北条氏政父子は駄々ッ児に似た一面を持っている。秀吉などとは比較にならぬ我儘さの小人物なのだ……

そう思つてあれこれ考へている時に、思いがけない難題が秀吉の方から出されて来た。

六

秀吉の難題というのはい——

これから、四国九州と日本中を平定するまですべての大名は大坂表へ人質を差出して、秀吉に協力することになつた。それぞれみな承服したゆゑ、家康も改めて諸大名にな

らい、至急これを差出すようにしたのであった。

秀吉の意向がなぜ俄かにこのように強硬になっていったのか？

それは彼が、佐々成政攻めに当って試みた新政策が、見事に奏功したことその他に、もう一つの原因があった。

秀吉は関白であると同時に、この頃すでに太政大臣の内意を得て、ただに日本の実権者であるだけではなく、不世出の大英雄として、位人臣をきわめる眼鼻もついていた。

そうなるともはや秀吉は、力と力の感じで諸大名に対すべきではなく、禁裏の威厳を背後にかざし、堂々とした命令者でなければならなかった。

それに彼は、今度のことでいよいよ家康を呑んでもいい。た。

家康はついに、秀吉の息のかかった上田城一つを処理し得ずに兵を退いた。この事は、家康が秀吉に充分意のあるところを匂わせた行動とも、己の力を知った慎ましきとも判断された。

それに、佐々成政は彼に肩を叩かれて、無邪気と言いたいほどの単純さで、征伐に赴いた秀吉に伴われ、ノコノコと京へ出て来て彼の威力を示したし、上杉景勝もまた、殆んど敵意の片鱗も見せず、新関白に協力を誓った。

諸大名が唯々として人質を差出したことは言う迄もな

い。

状況はいよいよ秀吉のために好転しているので、

(これで家康も否とは言うまい)

彼一人に求めるのではなく、命令者としてすべての大名に要求するのだと意を決した。

ところが、織田信雄を通じて、この命令を受取ると、徳川家の重臣たちは顔いろ変えて激昂した。

彼等は、今度のことも、いささかも秀吉に負けたのだとは思っていないかった。

上田城は陥落させずに引きあげたが、これは徒らに兵の損傷を避けるため、駿府の築城のため、又北条氏政への複雑な牽制のためなどで、徳川家の実力そのものはいよいよ充実していこそすれ、いささかも衰えてはいないと信じていた。

そうした時に、改めて家康の子たちに重臣の家族を添えて大坂表へ差出せというのである。

それでなくとも、本多作左衛門の伴の仙千代を取戻したことで、みな快哉を叫んでいる時なのだ。

秀吉は恐らく難題とは思っていない。

もはや時勢を察して、当然なすべきことゆえ観念せよ——そうした含みであろうが、士気の昂揚しきっている徳川方にとっては、これは徹頭徹尾、